大杉谷国有林からの手紙

54通目～式年遷宮から知る大杉谷の歴史～

2022年2月

今回の大杉谷からの手紙は、三重を代表する観光地である「伊勢神宮」と大杉谷の関わりについてお話します。

（1）伊勢神宮について

写真1 伊勢神宮(内宮)

写真1は伊勢神宮の写真です。伊勢神宮は20年に１度式年遷宮が行われ、社殿を新たに建て替えてご神体を新宮へ遷す大祭を行っています。式年遷宮では社殿を建て替えるため多くの御用材(ごようざい)が使用されています。使用する御用材は御杣山(みそまやま)といわれる山から伐り出されます。

御杣山は、現在木曽(長野県・岐阜県)とされていますが、かつては大杉谷国有林も御杣山として御用材を出していました(大杉谷からの手紙38通目にも記載)。その際に大杉谷を源流とする宮川は御用材を搬出する手段として活用されました。

(2)御杣山と大杉谷について

大杉谷は伊勢神宮から遠く離れた場所にあります。なぜ大杉谷が御杣山に選ばれたのでしょうか。これには理由があります。

式年遷宮が始まった頃は木材の搬出が容易な伊勢神宮の裏山が御杣山として役割を担っていました。しかし、式年遷宮の回数を重ねるたびに御用材として適した木が得られなくなりました。

そこで、御用材として利用できる大きい木を求めて、山の奥へ奥へと御杣山が変更されていきました。そして、江戸時代に入り大杉谷が御杣山として選ばれました。

写真2 大杉谷

江戸時代に御杣山となった大杉谷ですが、その後木曽に御杣山が移っています。しかし、100年後には再度大杉谷が御杣山として選ばれています。大杉谷は写真2のようにとても急峻で、木材を搬出するとなるととても大変な場所でした。

次に人力で伐採・搬出した頃の記録が残っていましたのでご紹介します。

写真3 ヨキ(斧)による伐倒

写真4を見ていただくと写真の左側に滑り台のような斜面が見えます。

丸太の搬出はこのような斜面を利用し、丸太を滑らせて谷へと落としていました。谷へと落とされた丸太は一本ずつ宮川を流されていきます。途中で丸太は筏(いかだ)として組まれ伊勢神宮まで運ばれました。

伊勢神宮の御用材を搬出する目的で利用された宮川は、大杉谷の付近に住む人々にとって唯一の流通ルートでした。そのため、宮川周辺は多くの人で賑わっていたそうです。

大杉谷が式年遷宮との関わりがあったことは、私としても誇らしさとともに驚きを感じました。皆さんも、大杉谷を訪れた際にはこうした大杉谷の歴史に思いを馳せながら登山をしてみると思わぬところに新しい発見があるかもしれません。

(3)昔の伐採・搬出

江戸時代にはチェーンソーや大型機械などはなかったので、御用材の伐採・搬出はすべて人力で行われていました。

伐採は斧（ヨキ)により木を伐倒していました。写真3は斧による伐倒風景ですが斧に対して木がとても大きいことがわかります。これほど大きな木はとても一人では伐倒できないので、何人かのグループで一本の木を伐倒していたそうです。

内宮と外宮の御神体を納める器をつくる２本の御神木を伐採する際は、伝統を重んじ、チェーンソーが普及した今も斧を使った手作業で行われています。

伐り方は貴重な木を伐り倒すときの伝統的な技、「三ツ紐伐り」(みつひもぎり)。幹の三方から斧を打ち込み、あらかじめ木の中心部分をくりぬいてしまう方法で、狙った場所に正確に倒すことができ、木が芯から裂けるのも防ぐことができます。

次に、伐倒した丸太の搬出についてです。

写真4 搬出風景

2022年2月
編集：三重森林管理署　尾鷲治山事業所　係員
発行：三重森林管理署　尾鷲森林事務所　地域統括森林官